
朽木家のとある日常 2

清瀬 柚李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朽木家のある日常 2

【Nコード】

N7251H

【作者名】

清瀬 柚李

【あらすじ】

流魂街にやって来た二人。店を回り、色んな発見をして、たどり着いたのは姉様のお墓。お盆だからね。

↑

（前書き）

お盆の話ですね

兄↓「きい」と読んで下さい（――）

ただ、正確ではないので正確な字面を知ってる方がいたら教えて下さい（――）

兄様は歩くのが早い。

さつさと歩いては、たまに振り返り私に道を聞いて再び歩き出す。

その繰り返しだ。

（どうせなら、私が隣を歩いた方が良いのかもしれない）

私達は、呉服屋に向かっている。

「兄様、其処真っ直ぐ行つた突き当たりを右です。そろそろ見えます」

「そうか」

小走りで兄様の横に付いてみる。

姉様は、毎日こんな風に歩いていたんだな、と思うと少し嬉しくなつた。（なんだか姉様に近付いた気がした）

「いらつしゃい」

「着物と帯はあるか？あと下駄」

「今日新しいのが来てますよ。お仕立てで？」

「いや。古着だ」

おや珍しい。奥から顔を覗かせた店主をまじまじと見つめる兄様。

「兄様。浦原では無いですよ」

「…うむ」

「似てるでしょう？」

へらへら笑う呉服屋店主。

商人は顔が似てくるのかもしれない。

「古着はあつちですよー」

店の片隅を指差す。

「兄様、参りましょう」

「うむ」

「いつてらっしゃーい」

無意識に兄様の手を掴んで引つ張っていく。

まさしく鳩に豆鉄砲。

きよとんとしたまま引き摺られていく兄様を店主はひらひら手を振って見送る。

「ごゆっくりー。…いやはや、女のコですなあ。お、いらっしゃい」

暖簾をくぐって古着屋へ！

「兄様、これはどうでしょう」

「…うむ」

「兄様、こちらの帯も良いですね！」

「…うむ」

「あ、でも…兄様には白や青が似合うな…」

「ルキア」

「はい」

「楽しいか」

「はい… あッ！申しわけございません」

「気にしなくともよい。… ルキア、兄のは私が選ばう」

「… はいっ。では、私が兄様を選びます！」

一護の奴は私達はセンスが無い、と言っていたが、私はいい方だ
と思う。

兄様はもはや神の領域だと思う。

「兄様、着てみて下さい」

「うむ。ではルキア、これを着てみよ」

「はい！」

私は赤に白い水玉を散らした浴衣に緑に赤い線の入った帯。

流石兄様ッ！

浴衣の赤と帯の赤が実に馴染んでいる！

… 流石兄様ッ！

我ながらなかなかだと思っていた合わせだが、更に兄様が着こなす
事で光輝いて見える！

「兄様っ お似合いですっ」

「うむ」

青地に鯉の泳ぐ浴衣に緑の帯に映える白兔。

兄様は最早神だと思う。

「花屋と菓子屋だったな」

自分の分は自分で払う、と言った私を振り切って支払いを終えた
兄様は私に言った。

「はい。お菓子屋に行ってから、花屋に行くつもりです」
「そうか」

兄様は少し目を細める。

何かおかしいだろうか。

実は兄様に秘密で髪を結う為の紐を買ってきている。
もう気付かれたか。

（兄様なら気付きかねない）

「ルキア」

「はい」

「参るぞ」

「はい」

…気付いてないようだ。

「あの、兄様」

「なんだ」

「茶屋に寄っても宜しいですか？」

「…うむ」

「ありがとうございます」

兄様は浴衣を翻して行ってしまった。

怒らせてしまっただろうか。

再び小走りで追い付いた。

「兄様、ちょっと宜しいですか？」

飲みかけのお茶を置いて、兄様の背後に回る。

少し後ろを向いた頭を押さえつつ前を向かせてみる。

長い髪を少しづつ手に取り、高い位置でまとめる。

兄様の髪は羨ましい程真っ直ぐで綺麗だ。

「ルキア、何をしている？」

「髪を結っています。…暑いので」

見ているだけで、と言うのは伏せておく。

「何故その様に高い位置で結う？」

「昔、こうしていたと聞いたので」

「…誰だ？」

夜一様です、と答えると重いため息を漏らした。

蝶々結びにして、手を離す。

「終わりました」

「うむ」

手を後頭部にやる兄様。

風が通るらしい。

「兄様、菓子屋に行きましょう」

お茶を飲み干して、まだ後頭部を気にしている兄様の手を引いて、

料金を払われて、菓子屋へ向かう。

私が払いますから、と年を押してお菓子屋へ入る。

「いらつしやいませ。…あら、浮竹さんとこの」

「隊長がお世話になっていきます」

「元気にしてる？」

「最近また風邪を拗らせまして、今日は私が代わりに参りました」

「あらあらお疲れさま。最近の死神さんは礼儀

正しいのね」

「いえ、その様な事はありません」

「謙虚ねえ。…お饅頭に金平糖にお萩ね。結構量があるけど大丈夫？」

「はい。力仕事は慣れています」

「流星は死神さんね。女の子でもあなどれないわ」

クスクス笑う看板娘。

「あと、抹茶羊羹を一つ」

「はいはい。5300環になります」

「兄様っ」

（わたし が 払いますからっ）

目で制して料金を払う。

「毎度ありがとうございます。…はい。丁度ね」

看板娘に見送られて、私達は花屋に向かった。

「兄様、姉様はどんな花が好きでしたか？」

「緋真か？」

「はい」

兄様は少し考え込むように視線を花々を眺め、私に言った。

「兄の選ぶ花が良いであろう」

「私がですか？」

頷く兄様。

一纏めにした髪が首に沿う。

「では、赤と白の花束で姉様は喜んで頂けると思いますか？」

「緋真の事だ。」

兄の選んだ物なら、何であろうと喜ぶだろう」

兄様がふんわりと笑った。

（恋次も隊長も信じてくれなかった。確かに兄様はなかなか笑ってくだらさないが、笑わない事は無いのだ）

菊、鈴蘭、彼岸花。

全く、種類の豊富な店だ。

…首が疲れる。

「すまぬ」

「はいはい。何に致します？」

…白い菊を」

「ありがとうございます」

緋色の紙を纏って、一層白が映える。

まるで兄様と姉様みたいだ。

「ルキア」

「はい」

「私が払う。兄は先に出ておれ」

「しかし、「私の話を聞いておったか。先に出ておれ」

「……………」

「緋真にであろう？

なら私にも関係のある事であろう？」

「しかし…」

「お客さん」

若い男性が口を開いた。

店番の店員らしい。

「半分ずつ払ったらどうですか？」

花が萎れちまいます。

困ったように、でも何処か怒っているようにも見える。

「さあ。どうしますか？アンタが払うか、アンタが払うか、二人で払うか」

びし、びし、と杓子で私と兄様を順番に指す。

「「…二人で」」

「毎度ありがとうございます」

打って変わってにっこりと微笑む。

…何だ。近頃の若者は肝が座っていると言っかなんと言っか。

絶対分かってるな。こやつ。

私達が貴族で、そして死神であると言う事。

花への愛が勝るのか。

大した若者だ。

何てことを年上であろう彼に対して考えたのは、彼が驚くほど童顔だったからだ。

あれだ。四番隊の山田花太郎。

兄様もまじまじと彼を見つめていた。

確かに面白い人だ。

今度女性死神協会で写真集の被写体候補に出してみようか。

線香の煙が薄く登る。

木陰のひんやりとした空気が気持ちいい。

綺麗に手入れされた墓石から兄様の愛の大きさを感じる。

「姉様……」

墓石の前でひざまづいて、手を合わせていた私は目を開いて微笑みかける。

兄様も手を合わせていたらしく、袖が擦れる音がした。

「兄様」

「何だ？」

「姉様は、笑っておられましたか？」

「…ああ。毎日、笑っていた」

「そうですか。…姉様、また盆に参ります。落雁、食べて下さい。
腕の良い職人ですから」

「……………」

兄様は黙って見つめていた。

兄様は兄様の想いがある。
だから深入りはしなかった。

「兄様」

「何だ？」

「また盆になったら、こうして一緒に姉様に会いに行っても宜しい
ですか？」

「…構わない」

「ありがとうございます」

夕日も沈みかける流魂街。

懐かしい気配がした。

兄様は目を細めて言った。

『…ルキア…白哉さん。お元気ですか？

私は此处で、待っています。
体に気をつけて』

空気の体が夕闇に溶けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251h/>

朽木家のとある日常 2

2010年10月28日03時30分発行